乳児

絆の時　愛と信頼の芽生え、おすわり　はいはい　たっち　世界が広がる

1　発達の特徴

- 誕生後、母体内から外界への急激な変化に適応し、著しい発達が見られる。首がすわり、手足の動きが活発になり、その後、寝返り、腹這いなど全身の動きが活発になる。
- 視覚、聴覚などの感覚の発達は目覚しく、泣く、笑うなどの表情の変化や体の動き、喃語などで自分の欲求を表現し、これに応答的に関わる特定の大人との間に情緒的な絆が形成される。
- 座る、這う、立つ、伝い歩きといった運動機能が発達することや腕や手先を意図的に動かせるようになることにより、周囲の人や物に興味を示し、探索活動が活発になる。
- 特定の大人との応答的な関わりにより、情緒的な絆が深まり、あやしてもらうと喜ぶなどやり取りが盛んになる一方で、人見知りをするようになる。
- 身近な大人との関係の中で、自分の意思や欲求を身振りなどで伝えようとし、大人から自分に向けられた気持ちや簡単な言葉が分かるようになる。
- 食事は、授乳から離乳食へ徐々に移行する。

【健やかに伸び伸びと育つ】　身体的発達に関する視点

＜著しい発達＞

子どもはこの時期、身長や体重が増加し、著しい発育・発達が見られます。まさに一個の生命体として発達の可能性に満ちているといえます。

運動面に目を向けると、生後４か月までに首がすわり、５か月ぐらいからは目の前の物を掴もうとしたり、手を口に持っていったりするなど手足の動きが活発になります。その後、寝返りができるようになったり、腹這いにすると胸を反らして顔や肩を上げ、上半身の自由を利かせて遊ぶようになったりするなど、全身の動きが活発になり、自分の意思で体を動かせるようになります。

また、この時期の視覚や聴覚などの感覚の発達は目覚しく、これにより、自分を取り巻く世界を認知し始めます。例えば、生後３か月頃には、周囲の人や物をじっと見つめたり、見まわしたりします。また、周りで物音がしたり保育者が話したりしている声がすると、その音や声がする方を見るようになります。そして次第に、このような認知が運動面や対人面の発達を促していくのです。

＜運動－座るから歩くへ＞

子どもは座る、這う、立つ、伝い歩きを経て一人歩きに至りますが、その時々にそれぞれの動きや姿勢を十分に経験することが大切です。こうした運動の発達により、子どもの視野が広がり、子どもは様々な刺激を受けながら生活空間を広げていきます。

＜離乳の開始＞

離乳が開始されると、母乳やミルクなどの乳汁栄養から、滑らかにすりつぶした状態の食べ物を経て徐々に形ある食べ物を摂取するようになります。そして、少しずつ食べ物に親しみながら、また咀嚼と嚥下を繰り返しながら、幼児食へと移行していきます。離乳食による栄養の摂取は、生命を維持し、健康を保つためには欠かせませんが、子どもが楽しい雰囲気の中で、喜んで食べることが大切です。

【身近な人と気持ちが通じ合う】　社会的発達に関する視点

＜特定の保育者との情緒的な絆＞

生理的な微笑みからあやすと笑うなどの社会的な微笑みへ、単調な泣き方から抑揚のある感情を訴える泣き方へ、様々な発声は保育者と視線を交わしながら喃語へと、生まれながらに備わっていた能力が、次第に、社会的・心理的な意味をもつものへと変わっていきます。

子どもが示す様々な行動や欲求に、保育者が適切に応えることが大切であり、これにより子どもの中に、人に対する基本的信頼感が芽生えてきます。特に身近にいる特定の保育者が、応答的かつ積極的に働きかけることで、その保育者との間に情緒的な絆が形成され、愛着関係へと発展していきます。

＜愛着と人見知り＞

身近な人の顔が分かりあやしてもらうと喜び、保育者とのやり取りを盛んに楽しむとともに、初めての人や知らない人に対しては、人見知りをするようになります。これは特定の保育者との愛着関係が育まれている証拠といえます。

＜言葉の芽生え＞

自分の意思や欲求を、声を出したり、喃語や身振りなどで伝えようとしたりします。こうした喃語や身振りなどに対して、身近な保育者が子どもの気持ちを汲み取り、それを言葉にして返すなど、応答的に関わることで、子どもは保育者の声ややり取りを心地よいものと感じていきます。そして、徐々に簡単な言葉の意味することが分かってくるのです。このような保育者とのやり取りが言葉によるコミュニケーションの芽生えとなります。また、生活の中で応答的に関わる保育者と同じ物を見つめ、同じ物を共有することを通し、盛んに指差しをするようになります。

【身近なものと関わり感性が育つ】　精神的発達に関する視点

＜活発な探索活動＞

特定の保育者との信頼関係による情緒の安定を基盤にして、探索活動が活発になります。特に、座る、立つ、歩くなどの運動面の発達により自由に手が使えるようになることは、子どもが自ら触ってみたい、関わってみたいという意欲を高めます。様々な物に手を伸ばし、次第に両手に物を持って打ちつけたり叩き合わせたりすることができるようになります。また、握り方も掌全体で握る状態から、すべての指で握る状態、さらに親指が他の指から独立して異なる働きをする状態を経て、親指と人差し指でつまむ動作へと変わっていきます。

＜身体表現＞

信頼できる保育者と一緒に絵本を見て、絵本のイメージの世界を味わうことや、歌やリズムに合わせて手足や体を動かすことを楽しむようになります。

2　教育・保育の重点

□　愛情のこもった応答的な関わりによる穏やかで安定した生活を通して、快適な環境の心地よさや伸び伸びと体を動かす楽しさ、生活のリズムの感覚の芽生えを培う。

□　愛情豊かで受容的・応答的な関わりを通して形成された愛着関係を拠りどころとして、身近な保育者と過ごす喜びや情緒の安定を育むとともに、表現することや言葉を発したいという意欲を育てる。そして、生涯にわたって人との関わりの中で生きていく力の基盤となる自分を肯定する気持ちを育む。

□　身近な環境に興味や好奇心をもって、見る、触れる、探索するなど、自分から関わることを通して、体の諸感覚の豊かさや子ども自ら思いを表現しようとする意欲と力を培う。

3　親育ち・子育ち支援　保護者へ発信しましょう・・・子育て支援と家庭の教育力向上に向けて

☆　**不安がいっぱい！！保護者の気持ちを丁寧に受け止め、安心して子育てができるようにしましょう。**

・どんなことに悩んでいるのか、日常の保護者との関わりの中で安心して相談できる状況をつくることが大切です。

・特に６カ月から１歳頃の子どもたちは、自由になった手で物に触れ、いたずらも盛んになります。また、離乳食も始まり子育ての悩みも多くなってきます。

・「分かっていても実行できない」そんな保護者の気持ちを丁寧に受け止め、悩みを共有できるように具体的な子どもの生活の様子や変化などを細かに伝えていきましょう。

☆　**生活のリズムを整えることが心の安定とともに体の成長に大きな影響を与えることを具体的に伝えましょう。**

・朝の光には心を穏やかにするためのホルモンの活動を高める働きがあり、骨や筋肉の成長・発達に大きく関係する成長ホルモンは眠っている間に最も多く分泌されます。昼間は起きて明るいところで生活し、夜は暗くして寝るという習慣を大切にし、元気いっぱい体を動かして遊び、お腹を空かせて喜んで食事をし、疲れたら眠るという生活のリズムをつくることが重要です。

☆　**子どもとの愛情溢れる触れ合いが乳幼児期にもっとも大切な愛着心の獲得につながることを伝えましょう。**

・「おなかがすいた」「おむつが濡れた」というように生理的な欲求や不快を泣くことによって表します。それに対して大人が「おなかがすいたの」「おむつをかえようね」など、やさしい言葉と行動で応えることが大切であり、こうした温かいやりとりが十分なされることが、子どもの豊かな心情・意欲・態度を育む基盤となります。

・微笑む、肌に触れる、言葉をかける、抱き寄せるなど愛情いっぱいのスキンシップを多くして愛情を伝え、人への信頼感が育まれるようにします。子どもは生まれもって人と関わる力をもっています。優しいまなざしと声で応答してあげることが大切です。

・起きている時は、見たり、聞いたり、触ったりできるよう、ガラガラを振る、起き上がりこぼしや手で掴みやすい玩具をそばに置くなどを心がけましょう。

☆　**「あー　あー」と口真似や模倣をしきりにしようとし、歌や手遊びをしてもらうことを喜ぶこの頃。家庭でも遊べるよう、具体的な方法を伝えましょう。**

・大人に対する甘えたい欲求が十分満たされて、はじめて安定して遊ぶ気持ちが出てきます。

・「いない　いない　ばー」や「ちょーち　ちょーち　あわわ」など抱き上げたり抱きしめたりしながら一緒に遊ぶことが大切です。

☆　**離乳食が始まり、不安や焦りが出てくるお母さんの具体的な悩みには、共に考えながら応えていきましょう。**

・味覚や臭覚などが発達してくると、食物に対する好き嫌いが出てきて嫌いなものは強い拒否反応を示します。無理強いや食べ方の干渉はせず、自分で食べようとする気持ちを大切にしながら、子どもの食欲や食事にかかる時間の個人差を十分配慮し、食べる意欲が出るようにしていくことが大切です。

☆　**乳幼児突然死症候群の発生の危険性もあり、家庭でも健康状態の注意深い観察が必要であることを伝えましょう。**

・睡眠にあたっては衣類、寝具などに注意するとともに呼吸、顔色などに十分気を配ることが大切です。また、うつぶせ寝や家庭で喫煙者がいる際の受動喫煙などによる乳幼児突然死症候群の危険性が高いことを知り、子どもへのきめ細かな配慮を忘れないようにします。

☆　**母体から得た免疫は次第に弱まり感染症にかかりやすくなることを伝えましょう。**

・体温、機嫌、食欲など、子どもの日常の状態をよく把握し、家庭との連携を深めることが大切です。

☆　**絵本との豊かな出合いが積み重ねられるようにしましょう。**

・お座りが出来るようになると赤ちゃんは両手で絵本を抱え、角をなめたり、落としたりと他のおもちゃと変わりなく絵本に接します。でも、ふとしたはずみにページが開き、その中に自分に親しいものの絵を見つけると「あーあー」と声を上げて喜びます。リンゴや自動車、イヌやネコなど現実のものとは大きさも色や形も異なり、匂いや手触りも感じられませんが、絵と自分の知っているものを結びつけることができるのは目覚しい知能の発達です。ページをめくるたびに新たな絵との出会いを楽しむ姿がみられます。

・絵本は身近なものを題材に簡潔でリズミカルな言葉が繰り返されています。お母さんの声に導かれて赤ちゃんは絵本の世界で遊ぶ喜びを味わいます。それと同時にものの名前を覚え、動作や状況を表す言葉も理解し、ものごとの認知が進んでいき、やがて自分の好きな本ができ、どんどん興味が広がっていくのです。

4　発達に必要な経験の内容

健やかに伸び伸びと育つ　身体的発達に関する視点

○　ものをじっと見たり、動くものを追ったり、手の平に触れたものをつかもうとしたりするなど、目や手を活発に動かす。
○　腹這いで体の前に手をついて上体を反らしたり、寝返りをしようとしたりする。
○　膝の上に立たせると足を突っ張ったりぴょんぴょん跳ねたりする。
○　手の操作性が高くなり、握る、いじる、つまむ、手を打ち合わせるなどの動きをする。
○　探索活動が盛んになり、這い這いで動き回ったり、つかまり立ちや伝い歩きをしたりするなど、様々な動きをする。
○　乳汁以外のものを飲んだり食べたりする。
○　離乳食が進み、喜んで食べるようになる。徐々にミルクを飲まなくなるようになり、自分で食べようとする気持ちが芽生え、形ある食べ物を食べようとする。
○　一人一人の生活のリズムに応じて、安全な環境の下で十分に午睡をする。

保育者の関わりのポイント

●　子どもの生活のリズムを大切にしながら、よく眠り、よく動き、母乳やミルクをたっぷり飲める環境を整える。また、おむつが汚れたら優しく言葉をかけながらこまめに取替え、きれいになった心地よさを感じることができるよう言葉をかけながら丁寧に関わる。
●　遊んでいる子どもの様子を見守りながら、子どものしようとしている姿勢の移動やその子の動きを妨げないように援助し、子どものやりたい運動が十分にできるようにする。
●　環境を整え自由に体の移動ができるようにし、這う、立つ、伝い歩くなどの運動を促し、子どもが、今、しようとしている気持ちや動きを見守りながら、その動きや遊びがゆったりと楽しめるように共感したり援助したりする。
●　離乳食は、保護者との連携を密にしながら、子どもの表情や食べたいという気持ちの芽生えを見ながら、楽しい雰囲気の中で子どもと向き合って、体調や機嫌に合わせて無理なく進めていく。
●　食事の介助は、保育者と子どもがお互いの顔が見える位置に座り、気持ちを通わせながらゆったりと進める。
●　子どもの成長による睡眠、目覚めのリズムの変化を把握し、機嫌よく過ごせることを第一と考え、欲求を満たしていくようにする。
●　乳幼児突然死症候群の発生の危険性もある。健康状態の注意深い観察が必要である。睡眠にあたっては衣類、寝具などに注意するとともに呼吸、顔色などに十分に気を配り、チェックを怠らないようにする。

身近な人と気持ちが通じ合う　社会的発達に関する視点

○　機嫌のよい時は、保育者のあやしかけに応じて「アー」「ウー」「エー」などのおしゃべりをしているような声を出したり、微笑んだり、時には保育者の顔をじっと見たりする。

○　快、不快がはっきりしてきて、抱っこすると体全体で喜びを表す。お腹がすいた、おむつが濡れた、眠いなどの生理的欲求や、相手をして欲しいなどの思いを表情や泣き声を変えて表す。

○　徐々に身近な保育者の見分けがつくようになり、保育者との関わりを求める。

○　いろいろな喃語を言ったり、話しかけられた言葉を真似したりする。

○　保育者の身振りや話しかける言葉が少しずつ分かってきて、連続の喃語を言ったり、指をさして自分の気持ちを伝えようとしたりする。

○　見慣れない場所や、人への不安感で人見知りが強くなり、いつも世話をしてくれる信頼できる保育者に対して強い愛着行動を示し、自分から関わる。

保育者の関わりのポイント

▲　保育者の働きかけに応えるだけでなく子どもの方からも保育者に能動的に働きかけてくるようになる。子どもの様々な活動に添って関わっていくようにする。

▲　機嫌のよい時は盛んに声が出るので、この声に同じように声を出して応えたり、優しい笑顔で語りかけたりしながら、「そう、うれしいのね」「気持ちいいのね」など情緒的な言葉をかけて相手をし、子どもとの相互関係を築くようにする。

▲　不快な感情を長引かせることのないように配慮し、適切な関わりの中で快い状態を感じ、満足感を得られるようにする。

▲　人への関心が高まり、じっと見たり、自分の気持ちを声で表したり、甘え、困惑、不安など感情表現を見せるようになる。これらの感情を十分に受けとめ、信頼関係の基礎が培われるようにする。

▲　目覚めている時は玩具を見せてあやすなど、人に対する関心や周囲に対する興味が育つようにし、過剰な刺激は避け、子どもの気持ちに添って、一人で遊ばせる時と、しっかりと相手をする時を見極めて、適切に関わるようにする。

▲　感情の発達とともに保育者への愛着行動をはっきり表す。すぐに要求に応えられない時は優しく言葉をかけて、その後必ず相手をして期待感に応えるようにする。

身近なものと関わり感性が育つ　精神的発達に関する視点

○　近づいてくるものを見たり、ゆっくり動くものを目で追ったりする。
○　玩具を差し出すと、自分から手を出したり、握ったりする。
○　散歩をして、きれいな色の花を見つめたり、イヌやネコにも興味を示したりする。
○　両手にものを持って打ち合ったり、叩きつけたりする。
○　周りにあるものに興味をもち、小さいものなどをつまんで遊ぶ。
○　ものに対して独占欲が出てきたり、思いが通らないと保育者の顔を見て泣いて通そうとしたりする。
○　手遊びや歌遊びを喜び、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しむ。
○　保育者と一緒に、様々な色彩や形のものや絵本などを見る。

保育者の関わりのポイント

■　戸外の空気や小動物、草花など保育者が感じたままを言葉に出したり、微笑み返したりして関わり、様々な感覚が呼び起こされるようにする。
■　見る、聞く、打ちつける、つかむ、引っ張るなどのことが満足できるように、音や色彩、形に興味のもてる玩具などを用意して、豊かな感覚運動を経験できるような環境を作るようにする。
■　保育者との安定した関係を大切にしながら、自分の行きたいところに行く、自由に振る舞うなどの行動を優しく見守り、子どもの満足感や得意な気持ちを受け止め、十分に活動できるようにする。
■　見えなくなっても在るという認知ができるようになる。落としたものを取って渡したり、「いないいないばあ」などに繰り返し相手をしたりし、自分の表現に対応してくれるうれしさを十分に味わえるようにする。
■　探索行動は子どもが知的好奇心を燃やして周囲の環境を認知する大切な学習行為である。子どもの興味や関心が満たされるように、安全で清潔な玩具、日用品などを周りに用意し、危険のないように気を配り、自由に触れ、十分に遊べるようにする。
■　リズムに合わせて体をゆすったり、口真似や模倣をしたり、自分を表現することの面白さや楽しさを受け止め共感していくようにする。
■　この時期に保育者と一緒に絵本を見る場面は、基本的に一対一の関わりである。絵本に描かれた状況や感情を共有することを通して、子どもと保育者のやり取りを生み出し、子どもの言葉に応じて、保育者は、言葉を補いながら楽しく言葉のやり取りを展開していくようにする。
■　絵本の中に身の回りのものを見つけて、絵本のイメージの世界と日常の世界を行ったり来たりする経験を重ね、ふりや見立てを楽しむその後の象徴遊びへつなげていく。

5　実践事例（1）

３か月の頃

眠って　起きて、眠って　起きて

24時間を通しての安定した生活のリズムを!!

たっぷり眠って機嫌よく目覚めたＡちゃん、穏やかな１日の始まり。保育者にあやしてもらい周りを見回したり、動くおもちゃを見つめたりしていたが、しばらくすると泣き出す。保育者が声をかけながらおむつを替えると上機嫌になる。でも、またすぐに泣き出したＡちゃん、今度はミルクの時間。おいしいミルクを飲むと満足した表情になる。ベランダで外気に当たり日光浴して、しばらくするとすやすやと眠りに入る。

●健やかに伸び伸びと育つ　▲身近な人と気持ちが通じ合う　■身近なものと関わり感性が育つ

●保育者に見守られながら、静かな雰囲気の中で、安心して眠る。

●外気や日光に当たり気持ちよさを感じる。

●空腹になると泣いてミルクを求めたり、ミルクを飲んでいる時は母親や保育者の顔をじっと見つめたりする。

■じっと見つめたり、まわりを見まわしたり、動くものを追視したりする。

▲生理的欲求や大人の姿が見えなくなるなど、不快や不安になると泣いて表現する。

▲保育者があやすと応えるように発声したり微笑んだり、 時には人の顔をじっと見たりする。

●手を口にもっていき、指を口にいれたりする。

☞ 保育者の関わりのポイント

☆　**特定の保育者との温かい触れ合いを大事にすることが、乳幼児期に最も大切な人への信頼感や愛着心を獲得する基盤となる。**

- 生活リズムは一人一人違うことを認識し、家庭での生活の様子を丁寧に受け止めることを特に心がける。寝付く時の習慣や前日の睡眠時間、授乳間隔、排泄状況などを連絡帳を通じて知ることでＡちゃんへの対応が次第にスムーズになってきている。
- 事前に把握しておいた心身の発達の状態、既往症、予防接種状況などの情報も大きな役割を果たしている。
- 朝の受け入れ、夕方のお迎えの時間は家庭と保育園のバトンタッチとなる大切な時間として考え、情報交換をきめ細かにできるように心がける。
- 吸湿性の良い木綿の掛け布団や硬めの敷き布団が、園でのＡちゃんの安全で安定した眠りを誘っているようである。Ａちゃんから目を離さずに呼吸、顔色などをきめ細かに観察し、記録することは安全を守るための重要な仕事であり、保護者へ具体的なＡちゃんの様子を伝える大切な資料にもなる。
- 家庭との連携を密にすることで、子どもの２４時間を通しての生活リズムを安定したものとしていく。

5　実践事例（2）

５か月の頃

体がいっぱい動き始めたよ！！

体も動き、声も出て

Ｂちゃんは首が据わってきて天井のモビールやガラガラの玩具、人の顔や玩具など動くものに反応し、目で追っている。保育者や母親が優しく言葉をかけたり玩具で誘ったりすると姿勢や方向を変えられるようになってきた。乳児体操や触れ合い遊びにも喜んで反応する。腹這いにすると頭をググッと持ち上げ「ブブ、ウグウグ」など声を出してご機嫌になるＢちゃん。

●健やかに伸び伸びと育つ　▲身近な人と気持ちが通じ合う　■身近なものと関わり感性が育つ

▲安心できる特定の保育者と心地よいふれあいを通して安定して過ごす。

●日差しや時間帯を考えて外気に触れて心地よさを味わう。

●保育者に立て抱きにしてあやしてもらうと体をねじる、手足を伸ばすなど様々な動きをして喜ぶ。

▲顔を見ながら表情豊かに語りかけるとキャッキャッと声を立てて笑う。

●仰向けの姿勢で手を高く上げ、こぶしをかざしてみたり、横向きの姿勢をとろうとしたりする。

■小犬の形の玩具の動きをじっと見つめる。

☞ 保育者の関わりのポイント

☆　**動いたり、反応したりする姿を大切にし、保育者が共に楽しむことを通じて、聞く、見る、触れるなどの感覚を豊かに育んでいく。**

- 子どもが自分の力で動く、周りのものに興味をもって目で追う、声を発する、保育者の言葉や動きに反応するなどの姿を大切にする。
- 首が据わってきて、頭を自由に動かしては、周りにあるものを目で追うようになってきた。安全に体を伸び伸びと動かし、自由にいろいろな姿勢がとれるよう場や空間を確保したり、玩具を見たり自分で触ったりして遊べるような環境づくりを心がける。
- 物理的な場や空間の確保のほか、室内の温度や湿度に配慮し、換気や通風に留意したこともＢちゃんが伸び伸びと体を動かして遊べる要因になっている。
- 伸び伸びと体を動かした後は、機嫌や肌の状態に気を配りながら衣類の調節や沐浴などをし、言葉を添えながらきれいになると気持ちよいということを感じられるようにする。「気持ちいいね」と言う保育者の言葉にＢちゃんはにっこりと微笑む。

5　実践事例（3）

６か月の頃

愛されて　安心　しあわせ！！

人との関わりの芽生え

初めて母親から離れて、保育園での生活が始まり不安いっぱいのＣちゃん。できるだけ早く安定して過ごせるように、意図して特定の保育者が抱っこしたり、やさしい笑顔で語りかけたりするうちに次第に表情が柔らかになってきた。今日はＤちゃんと隣り合って遊んでいるＣちゃん。２人で見つめ合ったり声を出したり心地よさそうに感じ合っている。

●健やかに伸び伸びと育つ　▲身近な人と気持ちが通じ合う　■身近なものと関わり感性が育つ

▲安心できる特定の保育者と心地良い触れ合いを通して機嫌よく過ごす。

▲隣で遊んでいたＤちゃんと目と目があって思わず微笑む。

▲Ｄちゃんが笑って声を立てると、同じように「アーアー」「ウーウー」と声を出す。

▲保育者に優しく、穏やかな気持ちで抱いてもらい、「大丈夫よ」「大好きよ」という気持ちを感じて安心する。

■玩具の色・形に興味をもって自分から触れて遊ぶ。

●おむつを替えてきれいにしてもらいながら、声をかけられたり、体にやさしくリズミカルに触れてもらったりして楽しく気持ちよくなる。

☞ 保育者の関わりのポイント

☆ **入園後、不安定な日々が続く子どもには、特定の保育者が愛情のこもった関わりを丁寧に進める。保護者には安心感をもってもらえるよう、子どもの昼間の様子の変化を伝える。**

- 特定の保育者が、ゆったりとした気持ちで抱いたり、口元が子どもによく見えるようにして優しい笑顔で語りかけたりするなど、愛情のこもった関わりを丁寧に進めたことで安心した様子が見られるようになってきている。
- 保育室が落ち着きのある安定した環境になるよう、カーテンや壁などにはやわらかい中間色を使用し、風通しや温度、湿度、明るさなどに配慮したことも安定につながったと思われる。
- 機嫌がよいＣちゃんは同じ場で遊んでいたＤちゃんと目と目が合って微笑んでいる。このような場面を大切にし、子どもの様子を伝えることで保護者の安心感を高めていく。
- 送り迎えの短い時間を有効に使い、受け入れの仕方や保育方法など、具体的なことを話し合ったり、昼間のＣちゃんの姿を伝えたりすることが大切である。
- 保護者へＣちゃんが喜んでいる触れ合い遊びを紹介するなど、親子で遊ぶ楽しさや遊び方を知らせることも、親子関係を確かなものとするために大切である。

5　実践事例（4）

7か月の頃

モグモグ・カミカミ・ゴックン　おいしいね　ニコッ!!

食べることを楽しむ

家族が食べていると欲しそうにしているので離乳食を始めたＥちゃん。保育園でも毎日食事の準備が始まるとテーブルのそばに行きたい様子で「アッアッ」と声をあげています。食べ物が口に入るとモグモグゴックンに合わせて食べて満足そう。保育者を見つめ穏やかなひととき。身近な食べ物が描いてある絵本も大好き。

●健やかに伸び伸びと育つ　▲身近な人と気持ちが通じ合う　■身近なものと関わり感性が育つ

●食事の時間や一日の量も決まってきて、食事のリズムが整ってくる。

●歯が生えてきて咀嚼や嚥下も上手になってくる。「モグモグ・カミカミ・ゴックン」と食べられるものの数や量も増え、少し大きなものや固い食材も食べられる準備が整う。

▲保育者の様子を真似て「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶をする。

■コップを持って飲み、スプーンを使ってこぼしながらも自分で食べようとする。

■身近な食べ物が描いてある絵本を喜んで見る。

☞ 保育者の関わりのポイント

☆ **離乳食を進めるにあたっては、健康状態や食欲を丁寧に把握し、看護師や調理師と離乳計画をたて無理のないように進める。自分で食べたいという意欲を大切にし、「食べることが楽しい」と実感できるように援助することが、食育の基礎を育むことになる。**

- 家族が食事をしていると欲しそうにしていたというＥちゃん。そろそろ離乳食を始めても大丈夫と判断し、開始する。
- 少し慣れてくると、食器やスプーンを自分で持って食べたいという欲求が表れ、積極的に食べ物を口に運ぶようになってきた。こぼしても、遅くても、急がせたり途中で止めさせたりせず、言葉や動作を添えながら楽しく食べることを目標に援助を進める。
- 全部食べたり、嫌いなものを一口でも食べたりした時は、家庭にも知らせ一緒に喜び、食事の楽しさにつなげられるようにする。
- 食べ物の名前を伝えながら、絵本などと照らし合わせて「モグモグ・カミカミ・ゴックン」を楽しんで習得できるようにしたり、「いただきます」「ごちそうさま」「おいしい」「あまい」「からい」「すっぱい」などの言葉と動作、味覚などが結び付くようにしたりすることも大切である。

5　実践事例（5）

1歳の頃

見て遊ぼう　触って遊ぼう！！

自分で体を移動できるようになって

いつもそばに保育者がいるという安心感の中で、Ｆちゃんは今日も安定して保育室で遊んでいる。まわりの玩具を引き寄せ、触ったり動かしたりしてしばらく遊ぶ。そのうち、お座りしている視線の先にある玩具に興味をもち、手を伸ばしてつかもうとする。まわりの様子を真剣に見つめるＦちゃんの目、いろいろなものに興味津々のＦちゃん。誰にも邪魔されず夢中になって遊んでいる。

●健やかに伸び伸びと育つ　▲身近な人と気持ちが通じ合う　■身近なものと関わり感性が育つ

■目で動くものを追って、遊んだり、目の前にあるものに手を伸ばして、触ったりして楽しむ。

■吊るし玩具を握ったり、しゃぶったりして、感触を楽しんだりする。

■お座りができ、両手が使えるようになると、玩具を手で持って、振ったり、揺らしたりして楽しむ中で遊びが広がる。

●心地よい言葉や音楽の中で安定して、自分のしたいことを楽しむ。

●自分で行きたいところに這ったり伝い歩きをしたりして移動して楽しむ。

▲保育者にあやしてもらい、楽しい、うれしい、などの気持ちをもつようになり、人との関わりを楽しむ。

☞ 保育者の関わりのポイント

☆ **子どもは、安心できる特定の保育者との心地よい触れ合いを通して安定し、周囲のものに興味を示すようになる。発語意欲が育まれ、運動機能も高まっていくよう、子どものやり取りを大切にする。**

- お座りがしっかりでき、伝い歩きもするようになったＦちゃん。風で動くモビールやまわりにあるきれいな色の玩具に興味を示す。
- 保育者がＦちゃんの視野や動きに合わせて用意したいろいろな玩具に、Ｆちゃんは手を伸ばして積極的に触れ、舐めたり手に持って音を出したりして関わっている。
- 少し触れるだけで動いたり音が出たりする玩具にＦちゃんの目が輝き、保育者が一緒に喜ぶと満面の笑みになる。
- 優しく語りかけたり発声や喃語に応答したりしてやり取りを楽しむ中で、発語意欲が育まれる。
- 安心して自分で自由に体を動かして遊べる場や人や物との関わりの中で、様々な体の動きをし、運動機能も高まっていく。
- 安心・安全に遊べる空間や場の確保、子どもが触れたり舐めたり床に転がしたりして遊ぶ玩具の清潔さの確保など、きめ細かな環境への配慮が重要である。

6　必要な経験に向けての工夫及び教材・玩具など

目で動くものを追う楽しさが感じられるように

○　揺れるモビールの様子や風車が回るのを見たりする。
○　オルゴールなど静かな音の出る玩具で遊ぶ。

・吊るしメリーゴーランド
・スタンドメリー
・モビール風車
・くす玉　　など

目の前にあるものに手を伸ばして遊べるように

○　吊るし玩具を握ったり、しゃぶったりして遊ぶ。
○　ぬいぐるみをつかんだり感触を楽しんだりする。
○　手が届く距離にある玩具を握り、振って遊ぶ。

・おしゃぶり
・歯がため
・ガラガラ
・人形
・ぬいぐるみ
・布のボール
・ベビー積み木
・音の出る玩具　　など

移動ができる楽しさを感じられるように

○　転がるボールや動く玩具を追いかけて遊ぶ。
○　牛乳パックで作った低いスベリ台をハイハイして上ったり下りたりする。
○　安全を第一に。舐めたり噛んだり叩いたり引っ張ったりするこの時期、小さいものだと飲み込んでしまう危険も。大きさも考えて！！

・布のボール
・木製の車
・クッション積み木
・空き缶を利用した玩具
　　など

お座りでの遊びを楽しめるように

○　マラカスを両手に持って振ったり叩いたりして音を楽しむ。
○　起き上がりこぼしをゆらゆらさせて遊ぶ。
○　いろいろなものを投げたり転がしたりして、ものの動きや音の違いに興味をもって遊ぶ。

・人形
・ガラガラ
・ぬいぐるみ
・布のボール
・木製の車
・ベビー積み木
・でんでんだいこ
・起き上がりこぼし　　など

保育者や保護者と触れ合って遊べるように

○　抱っこして寝転び、左右に揺らしたり時々ぎゅっと抱きしめたりしてスキンシップを楽しむ。
○　歌に合わせてリズミカルに触れ合って楽しむ。
○　おむつ交換や午睡に入る前など手遊びをして、気持ちをときほぐす。

・手遊び　歌遊び
「いない　いない　ばー」
「一本橋こちょこちょ」
「にぎにぎぽんぽんぽん」
「ちょちちょちあわわ」　など

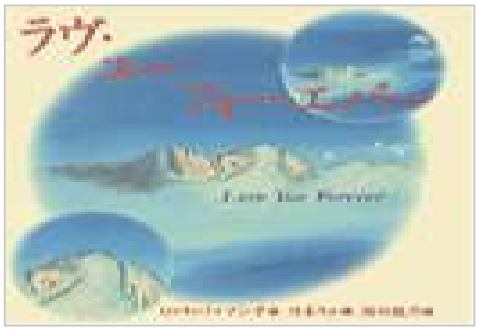
絵本との楽しい出会いができるように

○　色彩や図柄が鮮明で、簡単なストーリーを楽しむ。
○　音やリズムを楽しむ。

・絵本
「もこもこもこ」
「ぴよぴよぴよ」
「どんどこももんちゃん」
「いないないばー」
「おててがでたよ」
「にんじん」
「がたんごとんがたんごとん」
「ぶーぶーじどうしゃ」　など

※　**保育者や保護者にすすめたい絵本**
ラブ・ユー・フォーエバー
ロバート・マンチ／作　岩崎書店

静かな夜、我が子を抱き『愛してる』と繰り返す母の姿をやさしい色彩で描いた絵本。あわただしい日常に心が疲れたとき、子育ての原点に戻ることが出来る。



慣れ保育への保護者参加について

慣れ保育は新たに入園する子どもたちの安心感につながることから実施している園が増えてきています。保護者の安心感や園との信頼関係の構築に向けて、慣れ保育に保護者参加を取り入れていきましょう。実施にあたっては、保護者の負担を考慮し、理解を得ながら進めることが重要です。

＜慣れ保育の子どもへの効果＞
・心の拠りどころとなる保護者からも慣れ親しんだ家庭からも離れ、見知らぬ保育者と慣れない場所で生活する子どもの不安の解消、安心感の獲得

＜慣れ保育に保護者が参加する効果＞
・子どもに関わっている保育者の姿からの学び
・園生活への理解を通じた保育者や園への安心感の確保、信頼関係の構築